
そいつは人を選ばない

ぱちこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そいつは人を選ばない

【NZコード】

N4514A

【作者名】

ぱちー

【あらすじ】

この世に本当の平等と言えるものなどあるのだろうか。長い一生の中。一欠片の光もない絶望と、時間と世界の残酷さに触れたらその「平等」があなたの目の前に現れるかもしれない。美しく無慈悲な優しさが……。

とある町に一人の少年がいる。彼は親、姉を内戦で殺された。住む所も明日のための金も希望もない。絶望のままに歩く。それは必然的なことだった。

ただただ、あてもなく歩けば少年は広い通りに出る。そこにはあらゆる希望、活気、そして贅沢が溢れていた。

「……」

少年は虚ろな目でそれらを見た。咳いた。

「不平等だ」

「平等が欲しいのかい？」

振り向けば見た事のない女がいた。綺麗な女だ。白い肌に長い黒髪、はつきりとした紅いルージュがよく似合っていた。何かをくれる人にあつた事のなかつた少年は警戒することもなく、細い路地での経緯を話した。

「可哀想だねえ」

女は、ほう、と溜め息をつき少年の頬に触れた。

「！？」

「おや、どうしたんだい？」

女が首を傾げる。どうやら、この異常な冷たさに気が付いてないらしい。少年は少し重く口を開いた。

「お姉さんの手、すごく冷たいんだよ」

「ふふ、そうかい」

女がそれを聞いて笑うのが不思議だった。もつその事には慣れたようだ。初めから知っている様な感じだったからだ。そう思っていると今度は女が言った。

「あなたの頬はまだ、暖かいんだねえ」
(なんだかこの人……。)

少年はだんだんと不安になりつつあった。会つたばかりの人を疑う事は良くない事だとは知つていたが、目の前で家族を殺された彼の心は異様なまでに警戒心に覆わっていた。だが、今までの様な怒声でも罵声でもない優しい声を、しかも綺麗な女人の人にかけられ少年は安易に口を開いてしまった。

「僕、帰る」

「どこにさ?」

帰る場所などどこにもなかつた。

「お母さん達に会いたいかい?」

「会えるわけないよ」

「でも、あんたは平等が欲しいんだろう?」

「欲しいよ」

「本当だね」

「うん」

女は寒気がするほど笑つた。するほど、じゃない。本当に寒気がした。

「そう。分かつたよ」

女は寒気を誘う綺麗な綺麗な笑みを浮かべた。

「あんたには特別。早めにあげるよ」

少年は今氣付いた。自分の右手の人指し指には細い銀の糸が絡んでいる。

「人を選ぶ事のない、確実で純粹な平等、をね」

女が最後の言葉を言い終わるや否や、銀の糸はふつりと斬れた。少年が今まで生きてきた足跡は冷たい御影石のひやりとした石碑に刻まれてしまった。

女は前を見たまま、足下に倒れた少年に小さな声で言つた。錆びついたような古い声で。

「あんたがもっと大きくなつてからあたしに会つていれば
女がかがみ込む。手をかざした時

「本当の平等、の意味が分かつっていたかもね」

少年の体は砂が流れるように大気に消えた。

女はふわりと風に煽られるように立ち、思い出したように手帳を広げた。

「次は誰かねえ…」

あるページでめくる手が止める。眉をひそめ軽く目を伏せた。

「また子供か…」

そして女は消えた。黒い大きな鳥が北の空に飛んで行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4514a/>

そいつは人を選ばない

2010年10月21日22時15分発行